岡崎城総堀跡発掘調査　現地説明会（H31.1.19）

岡崎市教育委員会

[発掘調査]：平成 31 年 1 月 7 日～平成 31 年 1 月 23 日（予定）

[調査経緯]：岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画‐平成 28 年度改訂版‐」（H29.3）に基づき、今後岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めている。この調査研究の一環として、今回岡崎城総堀跡の発掘調査を実施している。

[総構えと総堀]

・総 構 え：城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や石垣、土塁で囲い込んだ城郭構造のこと。
惣構え、惣曲輪とも書かれる。

・総　　堀：総構えを構成する堀のことを「総堀」という。惣堀とも。
総堀は城郭の最外郭にあたり、軍事上の防衛施設である。また、総堀で囲まれた城下町の特権区域を示す役割も担ったとする見方もある。

[岡崎城の総構え]

・天正 18 年（1590）に徳川家康の関東移封に伴い岡崎城主となった田中吉政が城郭拡張、城下町建設を進める。城下町を造成し商人を移住させ、それまで菅生川（乙川）の左岸の明大寺を通っていた東海道を城下に引き入れる（二十七曲り）。そして城下町を「総堀」で囲み「総構え」構造とした。

・総堀は北から東側にかけては旧来の谷地形を利用して堀を掘削し、西側は河川を堀として利用し土塁を築くことで整備したとされる。

・田中吉政が構築した総堀は東西部分で全てが田中吉政の整備ではないともされるが、整備の着手や完了の時期については記した史料がなく詳細は不明。

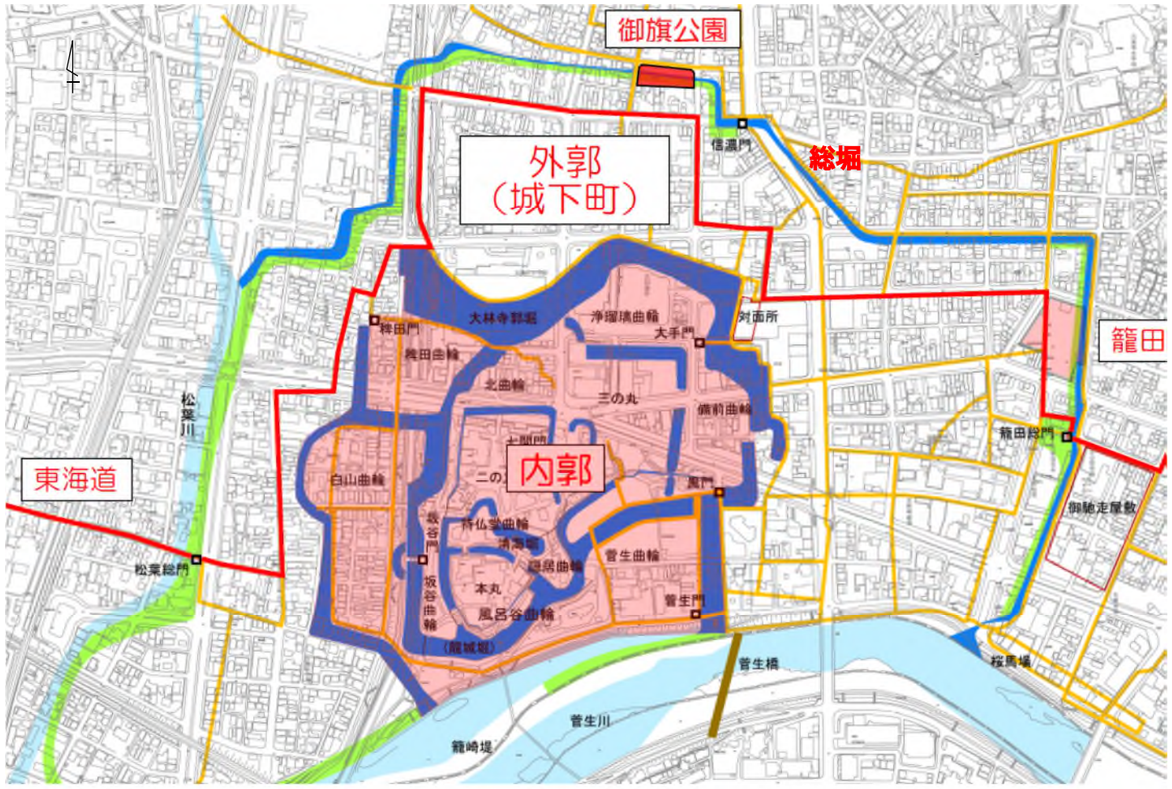
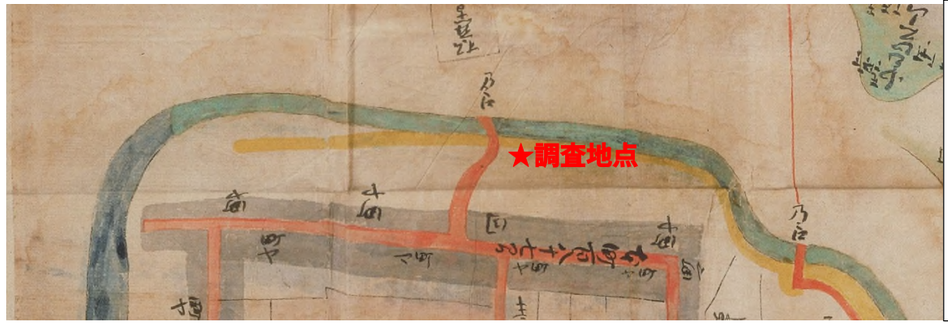


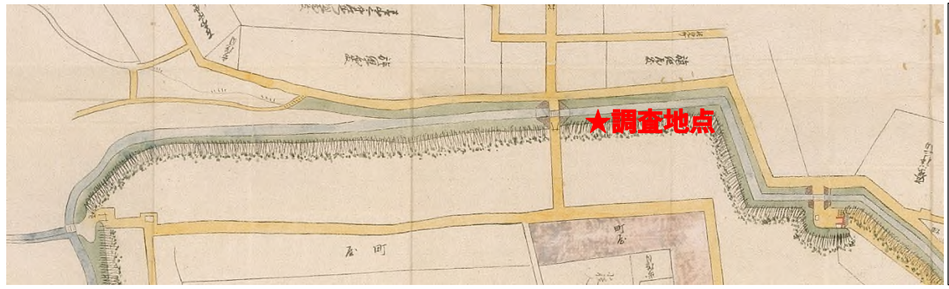
図１　岡崎城郭図と調査地点

[絵図における調査地周辺の変遷]



絵図①
田中の後の城主・本多家時代の絵図。絵図では総堀が「空堀」（緑色）で、城内側に土塁（黄色）が描かれている。

絵図①　17 世紀前半



絵図②
総堀が「水堀」となっていることが分かる。土塁部分は樹木が描かれ、土塁を表している。

絵図②　【18 世紀代】

絵図③
基本的には絵図②からの変化はないが、土塁部分は「藪」と書かれている。

絵図③　【1800 年頃】

地図①
昭和 2～5 年（1927～1930）作成。溝状に総堀の名残が残る。

地図①　【1930 年頃】

[調査区の配置]

図２で確認されるように御旗公園の北 2/3 が総堀に該当するものと想定し、発掘調査の調査区（トレンチ）を２か所設定した。また図２からは総堀の南側の堀肩は公園内に収まるが、北側堀肩は公園外に位置するものと想定された。そこでトレンチ１では総堀の城内側の堀肩や土塁の有無の確認を目的とし、トレンチ２（調査後埋め戻し済み）では総堀の堀底を確認することを目的とした。

図２　絵図③と現在の地図との重ね図（拡大）

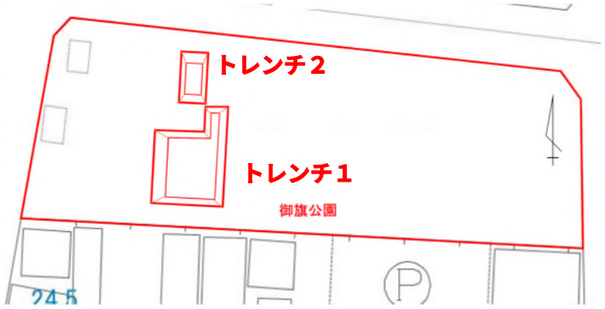


図３　現在の地図と調査区の配置図

［トレンチ１］

トレンチ１は総堀の城内側（南側）の状況を確認することを目的とした。調査前には堀肩（堀へ落ちていく始点）や土塁の痕跡が確認されることを想定して調査区を設定した。調査結果としては、総堀の城内側の土塁状及び堀側へ落ち込む堆積を確認した。

写真１　トレンチ１東壁（南西から）

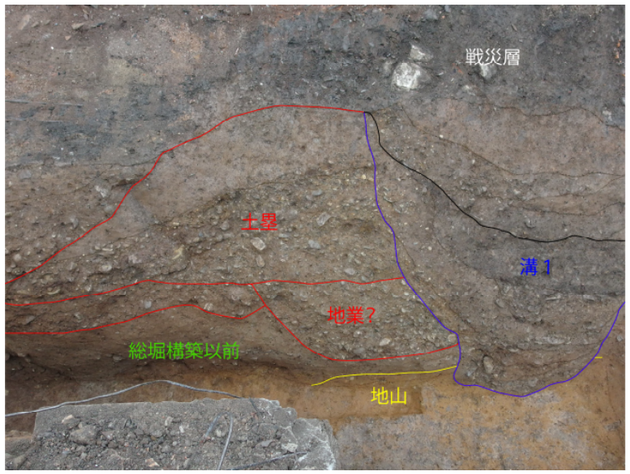


写真２　トレンチ１土塁部分（西から）

人為的にかさ上げされた礫層が確認され、その上部に南から北側へと斜堆積する土層を確認した。これらは総堀の土塁を構成するものと思われる。総堀の上層は戦災層となり、北に向かって落ち込む状況であることから、戦前まで総堀の名残として落ち込みが残っていたことがわかる。

土塁の凸状の盛土下層には地面を掘り込み礫層を充填している層が確認されたが、性格は不明。地固め等の地業であろうか。土塁の北側は堀法面となり、堀底へ向かって傾斜していくものと思われる。

総堀の土塁構築後にこれを掘り込む大規模な溝１が東西軸に検出された。溝１ は出土遺物からは近世に掘り込まれたと想定されるが、土塁を壊すような行為であり、その目的や機能については不明である。なお溝１の黒色土からは陶器のほか、大量の鉄滓が出土している。また調査区南壁でも総堀構築後に溝３、溝６が掘り込まれている状況が確認できる。

［トレンチ２］

総堀の堀底付近の状況を確認することを目的とした。現在の地表面から約 3.3m下層まで掘削したが、すべて戦災層であった。トレンチ１で確認した総堀の法面が総堀中心部に向かいさらに落ち込むことが想定され、なおかつ戦前まで相当な深さの堀跡として存在していたと考えられる。なお、トレンチ２では総堀北面の堀法面は認められず、より北側で総堀の立ち上がりが存在するものと想定されるが、御旗公園の範囲内には収まらないものと思われる。

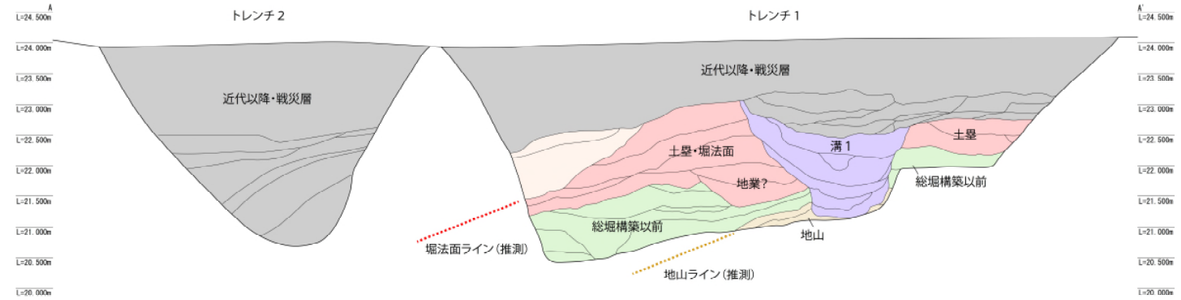


図４　トレンチ１・２東壁断面図（S=1/100）

［まとめ］

今回の調査地点は図５によれば、愛宕丘陵の甲山と西茶臼山（仮称）に挟まれた谷地形が南西から西に向かい存在していたことがわかる。この谷地形に沿って総堀が位置することから、自然地形を活かして総堀が構築されたことがうかがえる。トレンチ１で確認した地山が北に向かいレベルを下げるのも旧地形によるものと想定される。

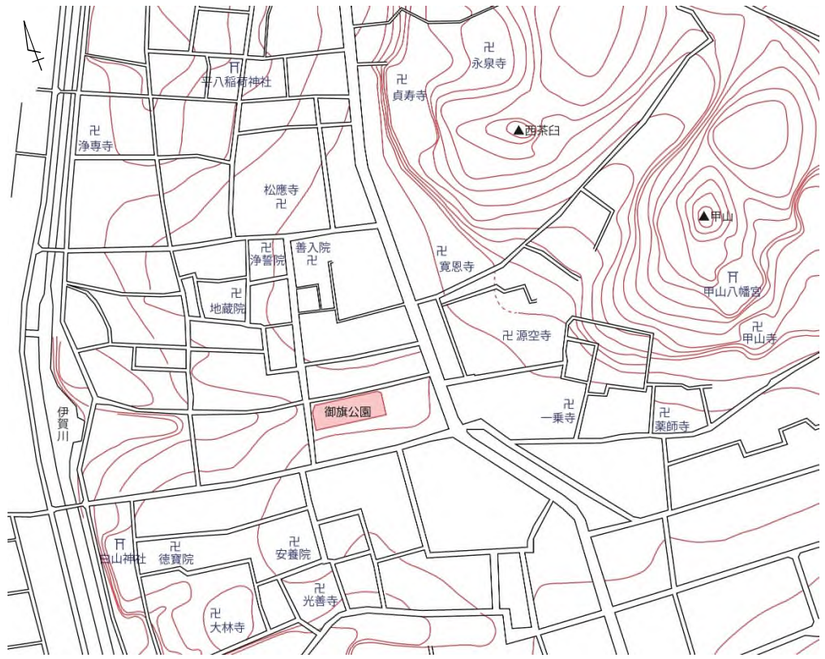


図５　昭和初期の地形図（下水道計画図をトレース）赤＝等高線

調査で確認された総堀の深さはトレンチ１の土塁上端からトレンチ２の最下端までで約 2.4mを測るが、堀底まではいたっておらず、さらに深いことがわかる。

なお、総堀や土塁構築後に掘り込まれた溝１・３・６などの溝の存在は総堀が近世を通じて改変を受けていたことを示すものであるが、その時期や性格について検討を要する。

※現地説明会資料は調査段階の所見であり、今後の調査により見解が変わる可能性があります。